

までも読んでいただいた。私は本学で学んだことの幸運を満喫した。

昨年暮れ、先生ご逝去の報に接したが、病床に在ってお通夜にも告別式にも行けなかった。この場を借りて不明をお詫びし、ご冥福をお祈りいたします。(1981・2・5)

## 一受講生の思い出

泉 武 夫

1962年、私が専修大学経済学部2年次生のとき、生田校舎2号館で故山田盛太郎教授の「経済原論Ⅰ」を聴講した。私が教授を知った最初である。これがMarx経済学に触れた最初ではないが(1年次で阿部市五郎教授の「経済学概論」を聴講している)、終始にこやかななかにアカデミズムを漂わせ、マルクスという発音(私にはそうきこえた)とあの独特の力をこめた字体を板書しつつ、汗をにじませながら進められる講義に清晨な印象を受けたことを覚えている。恥をさらせばこの段階では私は『序論』も『分析』も知らなかった。講義は経済学の概念からはじめて地代論にまで及んでいる。3年次に神田校舎で教授の「経済原論Ⅱ」を聴講した。所謂再生産表式論である。講義はQuesnay経済表から説きおこし、Marx経済表、単純再生産表式、転化式Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、拡張再生産表式、Rosa Luxemburg拡張再生産第Ⅱ式批判と進んで、経済循環=恐慌論にまで至るものであった。この年私は内田ゼミに入り、そこで先輩から『序論』と『分析』の存在を知らされ、荻窪の仮りの茅屋ではじめて繙いた。あの難解な『分析』の読解程度がいかほどであったかは言を要しないが、この一書によって学問=社会科学のなんたるかを、その偉大さと魅力を教えられた(ような気がした)。それがのちに学の林に分け入ろうと決心する最大の契機になっているように思う。

4年次で「日本資本主義論」を聴講した。その構成は、はじめに、序論其の一 世界史的過程での日本資本主義の位置、序論其の二 産業資本確立の指標とその基盤、第一編 日本資本主義形成論、第1章 生産旋回概念、第2章 産業資本確立期基準の再編と構成、第3章 世界大戦期における経済構造、第二編 戦後再生産構造の基本的構成、第1章 総説 軽工業段階から重化学工業段階へ、第2章 戦後段階を規定する諸要因、となつて、戦前日本資本主義論にとどまらず、戦後段階にまで及ぶものであった。

私が大学院に入った年、教授は「農業理論特論」を講義された。これは我々学生の「農政学」という希望を教授が受けてくれたものである。その内容についてはここで概略すら述べることはできない。縦横無隅。古代から中国文革までの世界史的過程のなかに古代ギリシア・ローマ、イギリス、フランス、ドイツ、ロシア、中国、日本の各国を位置づけられる。まさに

気宇壮大、惘然とすること屢であった。なかでも、私の関心とのからまりで最も強烈な印象として残っているのは、明治維新を起点とする日本資本主義の場合、Marx再生産表式とQuesnay経済表との併存という周知の命題に、さらに、中国によって批判された Wittfogel 中国経済表が積極的に考慮される必要があるとされた点である。また、Lenin 拡張再生産表式はRosaに通じる点があるとも述べられた。そして、大学院での最終講義で教授の問題設定を「自然法からDialektikへ」と一般化されたのである。

院生時代、初夏のある日曜日、夕食のついでに下駄ばきで立ち寄った荻窪駅近くの古書店で教授にお目にかかったことがあった。教授が何をお探しかったかお尋ねすることができなかったが、伝えきくところでは、ご自身で書き込みをされた芸術関係の本をお探しかったという。定かではない。その店頭にも『分析』があった。後日、土地制度史学会の途次、福山の製鉄所見学の折、両手を私の肩に置きながら、「やあ、元気ですか」と声をかけてくださったお姿は学生時代の印象と少しも変わるものではなかった。(1981・3・10)